

趙秩「温泉春色」試注・存疑

川口喜治（中国文学研究室）

二歳になる息子が夜になると「湯田の町の灯がついたね」と覚えてのことばで話す日々。すこし高台にあるわが家からは湯田温泉が一望できる。かつてこの湯田温泉を明の使者・趙秩という人が「温泉春色」なる題で漢詩に詠んだという。荒巻大拙氏の『山口十境詩考』から引くと「山川秀孕陰陽炭、天地鑄成造化爐。誰獻玉鷗天寶後、派分春色到東隅。」前半二句は、前漢の賈誼の「鵬鳥賦」に「且天地為爐兮造化為工、陰陽為炭兮万物為銅。」とあるのを典拠とするのは間違いないが、作者が直接意識したのはむしろ、唐の時代に都・長安からはるか西域（シルクロードの地）を訪れた岑参という詩人の「経火山」詩中の「不知陰陽炭、何独燃此中。」あるいは「熱海行」中の「陰火潜燒天地鑪、何事偏烘西一隅。」と思われる。岑参が訪れたのは西域、趙秩はいわば東域、ともに中国本土からは塞外の地であることが共通し、なおかつ「火山」「熱海」は、「温泉」と類似の関係にあることばと考えてよいだろう。四句目も、やはり唐代の辺塞詩人・王之渙の「涼州詞」の後半「羌笛何須怨楊柳、春光不渡玉門関。」を反用したものと見てよかろう。してみると西域にある玉門関から向こうの西の地には春はやって来ないとうたう王之渙詩に対して、趙秩詩の結句は同じ塞外の地でもここ湯田温泉には春の景色が訪れるのだという一種の賛辞と読むことができよう。ところで結句の解釈とも関わるのだが、実は私には趙秩詩の三句目がよくわからない。「玉鷗」は手許の大きな辞書やインターネットのデータベースで調べても見つからない極めて珍しいことばである。また「天寶の後」が何を指すのかもわからない。すぐに思い出すのは杜甫の「無家別」の冒頭「寂寞天寶後、園廬但蒿藜。」であり、ここで「天寶の後」は安祿山の乱勃発後を指す。安祿山の乱の悲劇のヒロインといえば楊貴妃で、それは山口の油谷の伝説で有名だが、何か関連があるのだろうか。私が山口の歴史に全く暗いために理解できないだけかもしれない。ご存知の方はお教え下さい。